

レポーター：今回はとてもインパクトのある、女性がどんとある絵なんですけども。

学芸員：これ、女性だと思いますか。

レポーター：はい。え、あれ、女性じゃないんですか。

学芸員：女性です。

レポーター：当ててよかった。

学芸員：女神ですね。

レポーター：女神様ですよ。

学芸員：今度は女神様です。はい。

レポーター：どちらの国の作品なんですか。

学芸員：はい。どこの国の作品だと思いますか。

レポーター：逆に質問返しですか。えーえっ。わからん。

学芸員：わからん。

レポーター：わかんないですよ。

学芸員：わからん、でいいですよ。

レポーター：勘でいいですか。勘。

学芸員：どうぞどうぞ。

レポーター：えーと、タイ。

学芸員：タイ。おお。ちょっと、どこらへんがタイかというところを。

レポーター：ほんとに勘なんですけど。タイの女性ってなんだか綺麗なイメージがあ
って。綺麗な女性だからタイかなって。

学芸員：じゃあ、この女神さまがタイっぽい。

レポーター：うん。かなって。

学芸員：かなって。自信は何パーセントくらいですか。

レポーター：30パーセント。

学芸員：おっ。結構ありますね。実はね、モンゴルなんですよ。

レポーター：モンゴル。

学芸員：モンゴルです。

レポーター：どういったところが、モンゴルなんですか。

学芸員：どういったところがモンゴルなんでしょうね。ほんとね。どうでしょう、こ
の空気感。

レポーター：でも、モンゴルって言われたら、単純なだけなのかもしれないけどモン
ゴルだなんて今思いました。

学芸員：でしょ。そうですよね。でもタイ。そっか、タイっぽいと言われても、そう
かなって感じはします。やはりタイは仏教の国ですよ。なので、こういう女神様
見て、タイっぽいっていう気もするんですけど、実はこれはモンゴル。モンゴルと

いえば、草原の国。

レポーター：そうですね。

学芸員：で、寒いですね。

レポーター：あとは遊牧とか、そういうイメージがあります。

学芸員：はい、なので、お馬さんに乗ってますね。で、ここはすごくモンゴルという国は基本的に砂漠があったり草原だったりして、遊牧民たちがいるんですよ。

でこれは、オルホン河というすごく長い川の、その奥の方に滝があるんですよ。その滝のあの女神様を描いた絵です。

レポーター：実際にある滝に女神様をくっつけたっていうのはあれですけど、という絵になるんですね。

学芸員：そう、強引にね。あはは。

レポーター：へー。それは作家の方が何か思いがあって描かれた絵になるんですか。

学芸員：そうなんです、作家の人は小さい時に一度だけ、この滝を見たことがある、という風に言ってるんですね。だけど、小さい時の記憶なんてだいたい覚えてないでしょ。

レポーター：覚えてないし、曖昧だし、っていうところですね。

学芸員：ですよ。だから、ある種こう、自分の頭の中にどんどんねつ造されていくわけですね。妄想が膨らんで、で彼はこんな風なものをちょっと描いちゃったわけですね。

レポーター：彼の幼いころに見た滝はこういう滝だったの、かな。

学芸員：ちょっと、ねえ。ちょっと違うものが見えている人かもしれませんよ。ほんとにね。

レポーター：これは実際いつ頃に描かれた絵なんですか。

学芸員：これは、最近ですかね。10年、20年前ですね。だから、あそこにほら人が立っていますよね。あれが作者だと思います？ははは。

レポーター：えー、そうなのかなって、今言われて思いました。そうなんだーって。

学芸員：でね。質問パート2いきます。これ簡単です。男性か女性、どちらでしょ。

レポーター：女性。

学芸員：おっ。なんで。

レポーター：なんかこう、着物が女性っぽいのと。

学芸員：ほうほう。

レポーター：なんか頭に物を乗せて運んでません？

学芸員：あーなるほど。

レポーター：私、知識もなーい感じで言ってるんですけど。

学芸員：いえいえ。

レポーター：頭にもの乗せて運んでいる人って女性なのかなっていう。

学芸員：なるほど、じゃあ、例えばもう少し聞いていいですか。ここのこの形どうなってるんですか。シルエットしか見えないですけど。どんなことしていると思います。ちょっと、やってみてもらっていいですか。

レポーター：ええー。

学芸員：どうなってるか。

レポーター：どうなってる。

学芸員：はい、ここの。

レポーター：手を挙げてる。

学芸員：手を挙げて持ってる。

レポーター：持ってる。

学芸員：持ってる。こんな感じですかね。イメージとしては。女性。

レポーター：女性。

学芸員：答えは正解です。

レポーター：よかった。めっちゃ、ドキドキするんですけど。

学芸員：答えは正解なんですけども、だけど、実は手はこうしてないんです。

レポーター：えっ、どうなっているんですか。

学芸員：これ実は、手のように見えるでしょう。見えるけど、これは実は、髪型なんですよ。

レポーター：えっ。

学芸員：髪の色です。

レポーター：髪の色がどうなっているか、わからない。

学芸員：わかんないでしょう。これモンゴルの伝統的な髪型というのは、日本だと全部束ねますよね、だけど、こんな風になるんですよ。ウルトラマンの母みたいな。

レポーター：あーあ。なるほど。こういう風に。

学芸員：ウルトラの母になってるんですよ。それとか、スターウォーズのなんとか姫がすごい変な髪型をよくしてるんですけど、それもモンゴルの髪型を真似したやつとかやっているんですね。で、これは実はモンゴルの伝統的な髪型なので、女性だっていうのがわかるんですね。だけど、まだ一つ疑問が出てくるんですよ。

レポーター：はい。

学芸員：さっき、モンゴルっていったら草原ですよ、遊牧ですよ。郊外にいったら全然人がいないですよ。そんなところに女性が一人でみたいな。

レポーター：え、どうして。

学芸員：なんか危険じゃないですか。

レポーター：ちょっと寂しい感じがしてきました急に。

学芸員：ね。

レポーター：はい。

学芸員：なんかね。ここら辺の周りに誰もいなさそうですよ。なんかすごい一人旅っぽいですよ。

レポーター：そうですね。静かな。

学芸員：なんでだと思いますか。

レポーター：えーそんな難しい質問を。

学芸員：なんでこの人は一人旅、女性で。

レポーター：でも、でも女神様が見守ってくれているから。えっ、傷心旅行？

学芸員：傷心旅行。するどい。

レポーター：するどいんですか。

学芸員：実は答わからないんですよ。

レポーター：そうですね。はは。

学芸員：わからないんです。なぜこんな女性の一人旅を描いたのか、というのはよくわからないですね。だけど、この絵も実はなんか、すごく人気のある絵の一つなんですね。多分それは結構雄大な感じがする、っていうの。例えば、雲とかも、わーと広がってくるし、水がさぁーっと流れてて、だけどちょっとここはなんかよく見ると、遠近感が少し変な感じなんですけど、というのは、パッと見ると、僕にはなんかすごい山とかを遠くから見ているようにしか見えない。

レポーター：そうですね。私も岩肌なのかなと思ったけど、岩肌にしてはちょっと。

学芸員：なんか距離が遠い感じがします。しますよね。だけどよく考えたら、普通滝のここだから、こんなに描写されるのが少し変なんですけども、なんかここ空間的な広がりが少しおかしいというか、なんかそれがまァ、ひとつまた味になっている作品かなあって。例えば、この女神さまですね、インパクトが。

レポーター：ありますね。で、この岩肌だとは思いますが、それが着物のように見えるんですよ。

学芸員：ですよね、肩ががぁとね。でもここちょうどよく見て頂くと、あとね、ここに岩とかに何か文字が描かれていたりとか、あとここに何か牛さんがいたりとか、これもよく見るといろんなところに細かいものが描かれていて、そういうところもじっくりと。

レポーター：そうですね。

学芸員：見て頂きたいですね。

レポーター：何かこの細かいところも見るとまたいろいろな面が見えてきて、とても考えさせられるというか。

学芸員：あら、考えちゃいました。

レポーター：はい、この人は何でここにいるんだろうとか。

学芸員：ねー、ほんとに。でも、これ、家の中にあつたらね、すごいご利益ありそうですね。

レポーター：まあ、拝みたくはなりませんよね。

学芸員：どうですか。

レポーター：拝んでおきますか。

学芸員：家に。

レポーター：家にですか。

学芸員：こんなにおっきい絵かかけられるスペースがなかなかないですけども。

レポーター：この作家の方っていうのは、すごく長い間絵を描かれているとは思いますが、いつぐらいに描かれた絵なんですか。

学芸員：これは90年代の前半です。で、実はその90年代前後っていうのは、アジアの国はどこも激動の時代、なんです。というのは89年に天安門事件とか、ベルリンの壁が崩壊したりとかして、すごくその社会主義の国が、がっと崩壊していく時代なんです。で、実はモンゴルもそれまで社会主義の国だったんですけども、92年にですね、社会主義やめちゃったんですよ。

レポーター：あ、そうなんですね。

学芸員：で、いわゆる日本と同じような、まあ市場主義経済をいれて、どんどんどんどん、経済的に発展していくんですけど、その反面、例えば、古い伝統であったりとか、貧富の差であるとか、だから、モンゴル、とてもすごく寒いところなんですけど、冬猛烈に寒くって、そういうところにストリートチルドレンが、結構いっぱいいるんですね。そういう人たちが、子供たちが、冬の寒さを耐える為に、地下のマンホールの中にですね、入って、暖を取ると。つまりモンゴルのウランバートルとかは、セントラルヒーティングじゃないですけど、その地下の中になんかあったかい温水が通っているパイプとかあるんですよ。なので、地下に入るとあったかい。という風なそういう状況があって、90年代、80年代後半からすごい激動の時代。そういうところに、生きているアーティストなんですね。

レポーター：ふうーん。そういうお話を聞くと、なんかこうその人の願いだったりとか。こうなんかご利益がありそうな、絵を描くような意味っていうのもなんとなく伝わってくるような気がしますよね。

学芸員：そうですね。多分だからこの絵の中には、そういう社会の苦しいこととかはあまり表れてないんですけども、多分きっとあるはずですよね。だけどそういう願いがありつつ、まあ、モンゴルの自然であるとか、そういうものを見て、何かを表現したいという事なんだなと思います。

レポーター：いろんな作品を見てると感じるんですけど、やっぱりパッと見るだけで

は感じない、じっくり見るからこそ、その思いが伝わってくるようなところがどの
絵画にもありますよね。

学芸員：そうですね。あと何かちょっとだけその国の、なんていうかバックグラウ
ンド、素を知ると、何かより分かりますね。

レポーター：そうですね。少しだけその国のこと、お勉強してくるとまた、楽しさが
変わって来るかもしれませんね。

学芸員：その通りです。

レポーター：ありがとうございました。

学芸員：はい、どうも。